

論文審査の結果の要旨

氏名：桶田由衣

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：受難、連帯、再生—*A Mask*における Sabrina と Chastity

審査委員：（主査） 教授 野呂有子

（副査） 教授 高橋利明

神戸市外国語大学教授 西川健誠

桶田由衣氏の論文は、William Shakespeare (1564-1616)と並び称される、17世紀英国の叙事詩人 John Milton(1608-74)による『ラドロー城で上演された仮面劇』*A Masque presented at Ludlow Castle, 1634* (1634)を包括的かつ精緻に扱うことによって、従来にはない新たな価値を本仮面劇に付与した。

A Masque presented at Ludlow Castle, 1634 が収録された、ミルトン著『1645年詩集』は英語詩作品とラテン語詩作品の二つの部門からなっており、英語詩作品の部門は約30編の詩作品から構成されている。作品の配列は単なる制作年代順ではなく、著者による意図的な配列となっている。そして、その最後に位置づけられているのが、本仮面劇 *A Masque presented at Ludlow Castle, 1634* である。つまり、ミルトンは *A Masque presented at Ludlow Castle, 1634* を本詩集の英語詩作品群の最終部を飾るのに相応しい作品として位置づけている。言い換えれば、1645年までの英語詩人としての自己の創作活動における、集大成の最高位に置かれるべき作品として本仮面劇を位置づけている、ということである。

この『詩集』出版の時期はクロムウェル主導の反国教会主義が高まり、大主教ロードが処刑され、クロムウェル指揮下のニューモデル軍がネイズビーの戦いで国王軍を破り、やがてはチャールズ一世の処刑が敢行される。共和制国家の誕生に向かって国運を左右する大事件が集中的に起きた時期であった。『1645年詩集』の刊行は、イングランド国民に対して、その進みゆくべき道を示す意図を持つ詩集であったと考えられる。

桶田論文は総頁数211頁からなる力作である。また、その組立ては以下の通りである。

第一章では『1645年詩集』所収の、英語で執筆された約30編の詩作品を比較・分析した。これらの作品中、約半数が女性の信仰心と美德を賞賛し、その受難と救済、そして再生を扱っていると鋭く指摘した。これは、*A Mask* の主要なモチーフである、受難のただ中にある主要女性登場人物が、女性の守護神により救済され、再生し、精神的成長を果たすという主題と重なる。このことから『詩集』の先行作品のテーマが統合されて *A Mask* へと収斂していくことを明らかにした。

第二章では *A Mask* を取り巻く文学的コンテクストを歴史的視点から扱った。まず、本仮面劇において女性（処女性）の守護神として機能する Sabrina の起源と先行文学作品における扱われ方を通時的に考察し、ミルトンにおいて女性（処女性）の守護神としての Sabrina 像が完成したことを確認した。次に、当時の国王及び王党派が支配態勢を強化するためのプロパガンダ展開の場として位置づけていた「仮面劇」というジャンルについて考察し、ミルトンが先行作品とはまったく異なる「puritan的な」仮面劇を創作したことを指摘した。特に王妃 Henrietta Maria が仮面劇出演時に好んでテーマとした“chastity”に焦点を宛て、王党派の説く、自己完結的な貞節観に対峙して、ネオプラトニズム的視点に立つ貞節観を包含するキリスト教的視点に立った貞節観をミルトンが樹立していることを明らかにした。つまり、ミルトンは「宮廷仮面劇」を“reform”（宗教改革）して、真にプロテスタント的な「仮面劇」を創造したのである。このように、本章において桶田論文は後続の諸章でより深く扱われることになるテーマについて準備的な議論を行っている。質量ともこの章だけでも *A Mask* 論として独り立ちし得るものと判断される。

本論文の中核になるのは第三章から第五章である。

第三章では守護女神の Sabrina と女性主人公である the Lady の間に見られる精神的母娘関係に注目し、両者の間に潜在的な救済者と被救済者としての結びつき、及び苦境における女性同士の連帯を見て取る。そして、それとは対象的な物理的・血族的母息子関係にあるギリシア神話の魔女キルケと魔物コーマスに対峙させて、両者の関係の違いを明確に浮き彫りにしている。ユングの母原型論が適切に援用されている

のが本章の強みである。なお、ユング心理学の視点から本仮面劇を論じた試みは少なくとも我が国においては初めてのものである。

第四章では専ら「貞潔」(chastity)の観点から論じられがちな the Lady について、Sabrina の教導により「慈愛」(charity) さらに「堅忍」(“patience”)を有す、キリスト教の範例的女性へと成長し、後の『楽園の回復』におけるキリスト像の予型といえる姿になっている点を鮮やかに論証してみせる。その際に、論者桶田氏は、その難解さのゆえに専門的ミルトニストたちが敬遠しがちな、ミルトンの組織神学と言える *Christian Doctrine* を傍証としての確に議論を積み上げ、論証に厚みを持たせている。欧米の批評家といえども、これほど明快に“chastity”から“charity”への議論の展開を行っている者はいない。

第五章では *A Mask* 中に特徴的な三つの事物、“haemony,” “chariot,” “baptism” に注目し、これらが喚起するキリスト教的救済のイメージを指摘しながら、キリストの予表としての Sabrina の性格を論じる。イメージ批評と予型論を連結させて論じた点が本章の巧みな所である。

以上、第1章から第5章までは *A Mask* 自体を論じた議論である。

第六章は現代小説家によるミルトン受容という観点から *A Mask* における Sabrina 像を逆照射した試みである。多くの研究において Virginia Woolf がミルトンに対して取った態度は、フェミニズム批評の古典とされる S. M. Gilbert & S. Gubar, *The Madwoman in the Attic* に見られる「家父長制度の権化ミルトンを徹底的に拒否し批判するものである」とされる。しかし、桶田論文においては、Virginia Woolf の処女作 *The Voyage Out* の精緻な読みを通して、作品中の女性主人公 Rachel の *A Mask* の(誤)読解の在り様が分析されている。そしてそれによって、否定的とのみは言い切れない、両面価値的様相を呈するモダニズム女性作家のミルトン受容があぶり出されている。新たな Woolf 像と創作活動におけるミルトン作品受容の微妙なメカニズムが明らかにされているという点に本論考の価値がある。本アプローチはアメリカ人女性研究者、A. Louise Desalvo が先鞭をつけ詳細な研究成果も出版されているが、その後続く研究は我が国では今まで殆どなされていなかったという点にも桶田論文の特質が指摘される。

桶田論文の功績は特に、以下の四点に集約される。これらは従来ミルトン研究において十分な考察がなされて来きたとは言いがたい。

1 従来、ミルトンの初期の詩作品の単なる集大成として等閑視されてきた『1645年詩集』に注目し、さらにその最後尾を飾るに相応しい作品として、仮面劇 *A Masque presented at Ludlow Castle, 1634* を位置づけ、それら全体の中での本仮面劇の独自の価値を見出した。

2 キリスト教的な「神の救済史」の枠組みの中に本仮面劇を位置づけることによって、本作品のテーマが真の“chastity”の追求にあることを明らかにした。一方で、『コーマス』という人口に膾炙した通称からも明らかのように、本仮面劇の主人公を敵対者コーマスであるかのごとく錯覚することから生じるさらに、深刻な錯覚、すなわち、『楽園の喪失』*Paradise Lost* (1667)の主人公を Satan であるとする錯覚を読者が抱くことの危険性に警鐘を鳴らしている。

3 従来、一部のフェミニスト批評家たちにより、「家父長制の権化」のごとく見なされてきた感のあるミルトンであるが、本仮面劇の中で、キリスト教的枠組みにおいて、女性同士の連帯こそが真の救済に至る道を用意する、という考え方を強力に打ち出している。言い換えれば、ミルトンがギリシャ・ローマ的なものに材源を求めつつも、それをユダヤ・キリスト教的信仰へと昇華している事、さらにその昇華が「女性の、女性による、女性のための」救済という形で実現している。この点を守護女神 Sabrina と女性主人公 the Lady の関係性を綿密に検証していくことによって論証した。

4 ユング理論を援用して、精神分析的に Sabrina と the Lady との関係性を分析・究明した点が、従来にない、新しい視点であり、時代の研究の潮にまさに乗っている点が極めて斬新にして、説得力を持つ。

瑞々しい人文主義的感性の持ち主でありながら峻厳な預言者の意識に導かれたキリスト教詩人になることを選んだのがミルトンである。そのキャリアの前半の締め括りとして *A Masque* を位置づけるにあたり、桶田論文の方法論は、ややもすれば瑣末な部分的問題に逃げ込んでいる現在のミルトン研究界、またより広くは硬直的な理論により過去の作品のしなやかな理解が妨げられている英米文学研究界において、詩人の作品の中に顕現している西欧文化中の重大課題について肉薄するという、王道に立ち返ったアプローチといえよう。しかも、心理学(ユング心理学)、神学(*Christian Doctrine*)的考察を加えることで、論

文に学際的広がりを与えながら、説得力のある結論を出している。これは若手研究者の仕事としては、十分に評価できるものである。よって学位を取得するのに十分なものであると認められる。

以 上

平成 27 年 1 月 22 日